



おみくじのルーツを探しに

—小学生良介・海・と妖精ミクの旅—

原地哲夫



目次

もくじ	1
初詣のおみくじ	1
初詣のおみくじ	2
良源上人と藤原安子	3
良源上人と藤原安子	4
良源上人と藤原安子	5
良源上人と藤原安子	6
良源上人と藤原安子	7
良源上人と藤原安子	8
良源上人と藤原安子	9
良源上人と藤原安子	10
良源上人と藤原安子	11
良源上人と藤原安子	12
良源上人と藤原安子	13
良源上人と藤原安子	14
良源上人と藤原安子	15
角大師	16
角大師	17
角大師	18
角大師	19
角大師	20
角大師	21
角大師 / 源頼朝	22
源頼朝	23
源頼朝	24
本能寺の変	25
本能寺の変	26
本能寺の変	27
本能寺の変	28
本能寺の変 / 天海上人	29
天海上人	30
天海上人	31

天海上人	32
天海上人	33
天海上人	34
天海上人	35
江戸時代の初詣	36
江戸時代の初詣	37
江戸時代の初詣	38
江戸時代の初詣／おみくじを結ぶ習慣	39
おみくじを結ぶ習慣	40
おみくじを結ぶ習慣	41
おみくじを結ぶ習慣 /おみくじの効果	42
おみくじの効果	43
おみくじの効果	44

もくじ

もくじ

- 一 初詣のおみくじ・・・・・・・・・・・・・・・・
- 二 良源上人と藤原安子・・・・・・・・・・・・・・・・
- 三 角大師・・・・・・・・・・・・・・・・
- 四 源頼朝・・・・・・・・・・・・・・・・
- 五 本能寺の変・・・・・・・・・・・・・・・・
- 六 天海大僧正・・・・・・・・・・・・・・・・
- 七 江戸時代の初詣・・・・・・・・・・・・・・・・
- 八 おみくじを結ぶ習慣・・・・・・・・・・・・・・・・
- 九 おみくじの効果・・・・・・・・・・・・・・・・

初詣のおみくじ

この物語は主人公の小学生源良介（みなもとりょうすけ）と同級生の女の子、天馬海（てんまうみ）そして妖精ミクと一緒におみくじのルーツを探る物語です。

主人公の良介は海の事が、最近特に気になってきている。しかし海のほうは良介に対し全くその気がなく、いつももの静かなのだがイケメン男性のことはすぐに、好きになってしまう性格である。

** 一、初詣のおみくじ**

「あけましておめでとうございます。今年もよろしくお祈いします」

「あけましておめでとうございます。こちらこそ、本年もよろしくお祈いします」

今日は、元旦。ここはとあるお寺の境内。挨拶をしていたのは小学校六年生源良介の両親と海の両親。良介と海は同級生で、保育園から小学校まで同じところに通っていて、親同士も会えばよく話をする間柄である。

「やはり、初詣は混んできますね。お参りは済んだんですか」

初詣のおみくじ

「ええ、今、あの長い列に並んで今終わったところです。これからみんなでおみくじでも引こうかと思っていたところですよ」

「そうですか。家も毎年家族みんなで運だめしと思って、おみくじを引くんですよ。じゃあ、一緒に引きましょうか」

この寺のおみくじは元三大師みくじとって、日本のおみくじの元祖となったもので、お寺ではよく使われているおみくじである。

「ワー、やった！ 大吉だ！」良介のおみくじは八十九番の大吉だったようだ。

「私は、中吉。良介君には負けたけど、パパやママの「吉」や「小吉」よりはいいから、まあいいか」海は少し悔しい気持ちもあったが、そこはもう今年四月からは中学生になるのでこらえた。

** * ちなみにこのおみくじの順番、大吉が一番良いのは分かるが、吉の順番はどこになるのだろう。それはやはり順番通り、大中小と来て、ただの吉である。そして末吉がある場合も言葉通り、それが末の吉である。ただし、吉は大吉の次に良いと言う見解もある。* **

良源上人と藤原安子

その夜、二人はそれぞれ家に帰り、正月のテレビ番組を楽しんで、その後それぞれ自分の部屋で布団に入ったが、おみくじの始まりが少し気になっていた。二人が眠りにつくと、二人の夢の中に妖精のミクが現れた。ミクは小学生くらいの女の子で髪におみくじのようなりボンをしていた。

二 良源上人と藤原安子

「ねえ起きて。おみくじがどう始まったのか気になるでしょ？ その秘密を探りに行きましょう！」

眠気まなこの二人は、目をこすりながらミクを見ると、すると二人は不思議なことに今日行った寺の境内にいた。

二人はミクを見て驚き、尋ねた「君はだれ？」

「私は、おみくじの妖精ミクよ！ あなたたちが今日、疑問に思っていたおみくじの事について教えてあげる。だからわたしと一緒におみくじについて探る旅にでかけ出掛けましょう」二人は好奇心いっぱい、「ワァー、面白そう」と二人はミクとおみくじのルーツを探る旅に出かけることになったのだ。

「今日お参りしたお寺にあったおみくじは元三大師みくじと言って日本ではすごく有名なものなの。このおみくじが日本のおみくじの基礎になったものなのよ」

良源上人と藤原安子

「ヘーッ。何で日本でこの元三大師みくじがそんなに有名なの？ 元三大師って誰？ おみくじってどこで引いても同じものじゃないの？ ねえ海ちゃん！」良介はこんな真夜中にまた海と会えて、さらに一緒に映画のような旅をすることができるなんて、内心跳び上がるような気分だった。

「慌てないで。それを今から教えてあげる。じゃあ今日おみくじを入れた『吉むすび』を握りしめ「元三大師様に会いたい」と心の中で唱えてみて」

ミクと良介、海も『吉むすび』を握りしめ「元三大師様に会いたい」と心の中で唱えながら押した。

三人は平安時代に来てしまった。「あれっ。ここはどこ？ そして服装も何か昔の服になっちゃった。」良介と海、何が何だか頭が混乱して、ミクに聞いた。

「ここは千百年ほど前の平安時代で、天皇や貴族がいる宮中よ。この時元三大師は良源上人と呼ばれていたの」そこで女性は十二単の華やかな着物、男性は束帯、衣冠など時代劇に出てくるような服装をしていた。そこに何やら女性達が騒ぐ声がしている。

「いらっしやったわよ」「あの素敵なお顔をまた拝めるのね」このような話し声があちこちから

良源上人と藤原安子

聞こえた。

『素敵なお顔』海のイケメン好きアンテナがピーンと立った。「えっ。誰が来るの？ 昔のアイ

ドル？」海はそこにいた他の女官に比べより綺麗な着物を着た女の子に聞かすにはいら

れなかつ

た。
「あいどる？ 何の話？ 良源上人様よ！ あのお方のお顔すごく凛々しく、宮中の女人は

みんな上

人様に夢中なのよ。それで今日は父に会いきたのよ。ところでそなたらは誰じゃ？」

「私たちは良源上人に会いに来た者で、私はミク、この男の子は良介、そしてこの女の子は海

です。どうぞよろしくお願ひします。今日は良源上人様が作られたおみくじについて教えてもら

いたくやってきました。あなたはどちら様でしょうか」

「ああ上人様が民を救うために作られたあのお札の事ね。わらわは藤原安子です。それでは、

後で一緒に良源上人に会いに行きましょう。でも上人様に変なことしたらダメよ」安子は海の方

を向いた。

この女性は後に第六二代天皇村上天皇の妃となる藤原安子である。この時安子は十三才で、成明

親王（後の村上天皇）と婚儀を挙げたばかりである。そしてその父は、朝廷内で多大な権利を持

良源上人と藤原安子

つ右大臣の藤原師輔である。藤原安子は成明親王の妃としての自覚は十分あったが、多くの女官にが夢中になる良源上人に同様に気になっていた。

良源上人は後に天台宗第十八代天台座主になるが、その時は二十八才であった。良源上人は十二才の時比叡山に上がり、仏門に入った。そして若いうちから、多くの高僧と法論を行って論破し、宮中でも一目置かれる存在であった。しかし、本人は仏に使える身であり、女人からのそのように自分の顔が関心を持たれるのにはほとんど嫌気がさしていた。

「いつもながら上人がいらっしやると、宮中の女の人が騒ぎ立てますな。でも悪い気はしないでしょう」藤原師輔は笑いながら尋ねた。

「いえ。藤原様、私は女人から容姿が理由で好意を持たれることは、立場が違うので困っております」良源上人は困り果てた顔をしていた。

「まあその端正な顔立ちでは、女どもが夢中になるのも無理はないと思いますがな。そこに飾ってある般若の面でもかぶりますかな。ハッ、ハッ、ハッ！」師輔は冗談のつもりで言った。

「うん。それにしましょう。その面をいただけますか」良源上人は一つの答えが見つかり、師輔に真剣な顔でお願いした。

良源上人と藤原安子

「上人様がそうおっしゃるならば、どうぞ遠慮なくお持ちください」師輔は良源上人に般若の面をあげたのだった。

「それで今日藤原様にお伺いしたのは、わが延暦寺では承平五年に起きた火災によって失ったお堂や塔を立て直したいと考えております。その際は是非とも藤原様のお力をお借りしたく存じます」

「我が国においては仏の道は、民を治めるのになくてはならぬ重要な教え。もちろんお手伝いさせていただきます。その代わりと言っては何ですが、娘の安子が子供を多く授かりますよう、どうか安産祈願を上人様にお願いいたします」

隣の部屋で二人の会話を来ていた安子は、自分の事を話しているのはわかっていたが、まだまだ真実味が感じられなかった。そして二人の話が終わり、良源上人は早速般若の面を付けて部屋を出たところに、安子とミクたち三人と鉢合わせした。

「きゃー！」安子ら四人は驚き叫び声をあげた。

「これは失敬、失敬。安子様驚かすつもりはございませんでした」

良源上人と藤原安子

「あー、本当にびっくりした。せっかくの凛々しいお顔をそんな怖い面で隠すなんて」安子は少し残念そうだった。

「本当に失礼しました。ところで今日は私に何かご用でしょうか。それにご友人もご一緒とは珍しい」良源上人は将来皇后となる安子を驚かせてしまい、済まない気持ちで話しかけた。

「ええ。良源上人様が作られた、あの民を救うおみくじと言うお札についてこの者らが興味があるらしく、上人様にお会いしたかったらしいのです」

安子はミクら三人に顔を向けた。

「おみくじですか、それはそれは、良い心がけです。あのおみくじを引いて御託宣のとおり、日々心がければ、毎日つつがなく過ごすことができます。そなたらも寺に来れば、おみくじをひいてしんぜよう。よろしければこれから安子様と寺に来なさい。藤原様に安子様の安産祈願を頼まれているので」良源上人はミクたちに優しく話しかけた。

「ハイ！ ぜひお願いします！」今まで良源上人の顔をポーッと眺めていた海が突然ひときわ大きな声で返事をした。そこにいた皆があっけにとられたかと思うと、海以外の者が笑い出した。「ワ

良源上人と藤原安子

ッ、ハッ、ハッ！」海は突然の事だったが、恥ずかしくなり頬を赤くした。

「いや、それくらいおみくじについて熱心に考えてくれるなら、本当にうれしい限りです」良源上人は海が大きな声を出したことの本当の理由を勘違いしたのだが、他の三人は、海が良源上人の顔に見とれていて我を忘れ、大きな声を出したことが分かっていたので、皆笑いをこらえていた。「それでは、一足先に寺に帰り皆さんをお待ちしています」と言い残し、良源上人は延暦寺帰っていった。

「良源上人様って、かっこいい！」海は良源上人が部屋を出てしばらくすると我に返った。

「何言ってるんだよ。海ちゃんは何しに来たんだよ！」良介は、やさしい良源上人が好きではあったが、海がそんなにも良源上人に夢中になっているので、気分がもやもやしていた。

「別にいいでしょ。かっこいい人は、かっこいいの！ 私がどう思うと私の勝手よ！」

「二人ともケンカしないで！ でもお上人様は確かに素敵だわ」とミクが言ったかと思うと、「そうよそうよ。良源上人様には、わらわも宮中の女官も夢中なのよ」安子も口を出した。

「ミクや安子様までそんなこと言って」良介はさらに呆れたが勝ち目のない勝負だと割り切っ

良源上人と藤原安子

た。

「でもお上人様も大変ね。あんなに綺麗な顔なのにそれをあんなに怖い鬼のお面で隠さなければならないなんて」海は良源上人がどんな気持ちで鬼の面をしているのかと考えた。

「そうだな。イケメンもつらいね」と良介は笑った。

藤原安子、良介、海、そしてミクと安子のお付きの女官が延暦寺にやって来た。

そして安子のお付きの女官が延暦寺の者に良源上人への取次ぎを頼んだ。

「安子様が藤原様からの依頼で、良源上人に安産祈願をしてもらいに来ました。良源上人にお取次ぎお願いします」

「はい、良源上人様は準備して既にお待ちでございます。どうぞこちらへ」そう言われて安子らはお堂に通された。

「安子様、お待ちしておりました。早速安産祈願をいたしましょう。安子様以外隣の部屋で待っていて下され」鬼の面を付けていない良源上人は、宮中にいる時に比べ落ち着いたようで、安

良源上人と藤原安子

子たちにそう告げた。そして安子を残し良介らは部屋を出て行った。

良源上人による藤原安子の安産祈願が始まった。その間良介たちは安子が将来歴史上重要な皇后で天皇家を支える人となり、今の今上天皇に繋がる方になるんだと分かり、背筋が伸びる気分となった。そうしているうちに、安産祈願が終わり、良源上人が良介の部屋に入ってきた。

「安子様の安産祈願は終わった。これで安子様は安産で更に子宝に恵まれるだろう。君らはおみくじについて知りたかったんだったな。これから安子様のおみくじを引くので君らも来なさい」

良介らは良源上人についてお堂に入っていった。すると安子がお経を一心不乱に読んでいた。

「おみくじを引くにはそれなりの作法があるのだよ。それには、まず身を清め、手を洗い口を漱ぎ、そして今安子様は観音経を読誦しておられる。その後、聖観音真言『オン・アロリキャ・ソワカ』、十一面観音真言『オン・ロケイ・ジバラ・キリク』、千手観音真言『オン・バサラ・ダルマ・キリク』を三百三十三回唱え礼拝するのだ。最後にみくじ箱を両手に持ち願文を読み、御籤棒を取り出すのだ。よってこれからおみくじが引き終わるのはかなり時間が掛かるだろう」良源上人はそう教えてくれた。

「えっーーーーー！ おみくじを一枚引くのにそんなにかかるんですか！」良介と海は目を丸く

良源上人と藤原安子

して驚き、叫んだ。

「シッ。静かになされ。今安子様が経を読誦されている」良源上人は目をカッと見開いた。

「アッ、ごめんなさい。でもおみくじを引くのにそんなに、お経を読まないといけないなんて、考えたこともなかったから」海は良源上人に誤った。

「本来このおみくじのは、私が観音菩薩に祈念して授かり、それをまとめたものだ。またこの漢詩、五言四句の言葉で、最初の一句は生まれてから一五才まで第二句は一六才から三十才まで、第三句は三一才から四五才まで、第四句は四六才から六十才まで、そして六一才からはまた第一句に戻るのだ。私はこのおみくじにより、人々が元気になり、将来の生き方の指針を与えているのだ。安子様もこれから大変な人生を歩まれるので、是非ともお力になればと思っておる」良源上人は優しい顔に戻り、おみくじについて説明してくれた。

- *室町時代に中国から伝わった天竺靈籤という説もあります。*

「まだまだおみくじを引くには時間がかかるだろうから、みんなは外を歩いてきたらどうだ」良源上人はそう奨めてくれた。

良源上人と藤原安子

そして良介、海、ミクの三人は境内に出た。

「おみくじの事はだいぶ分かった？」ミクは二人に尋ねた。

「うん、今まで引いていたおみくじはすごく手軽に引いていたけれど、こんなに大変だったんだね。それも本当に大事なことを決めていたし。僕は今まで、おみくじはいつも大吉が出てくれればすごく嬉しいと思っていただけだった」良介はおみくじに対する考えがだいぶ改まった気がした。

「そうそう、それに良源上人様はあんなにイケメンで人々のことを考えてくれているなんて、本当に好きになっちゃうわ！」海も感動していた。

「やっぱりそこに話は行くのか。まあいいや。僕も良源上人は大好きだから」

良介は僅かな嫉妬心を感じていた。

そして夜になりまたお堂の部屋に戻り、良介らは待っていたが、そろそろおみくじを引く時間となり、安子のいるお堂に戻った。そして良源上人が御籤箱を振って出てきた御籤棒は、九六番だった。「どれどれ」良源上人は一冊の本を取り出し、九六番を調べた。

「安子様の運勢は非常に

良源上人と藤原安子

良いです。大吉です」

「良かった！」一言安子は今まで緊張して、疲労度も最高点に達していたが、大吉が出てその疲れも一気に取れた気がした。

「安子様は、無事に皇太子妃となり、そして皇后さまとおなりになるでしょう。そして藤原師輔様が懸念されていた、出産も無事にされ、お子様も多くできるでしょう。しかし他の人にも優しくなくてはなりません。もし、そうなさらないと、不吉なことも起きることになるでしょう」

良源上人はそう続いて説明してくれた。

「安子様なら、私たちが助けてくれたし、人に優しくする点は心配ないわね」海は安子の運勢が良かったので、自分の運勢が良かったかのように喜んだ。

「じゃあ私たちは、おみくじを引く時間はないので、更におみくじについて調べに後の時代を見に行きましょうか。それに今あなたたちに言うことができないことがあるので」ミクは意味ありげな言葉を良介と海に言った。

「いいよ。お経をあんなに読むのは僕にはちょっと無理だからな。本当は本当の本場のおみくじを引きたかったけれど、あのお経を何時間も読むとなると遠慮しとくよ」「そうね。私にも無

良源上人と藤原安子

理だわ」

「良源上人様、安子様、私たちはこれで行かせてもらいます」ミクはそう伝えた。

「そう！ 皆もおみくじを引いていけばいいのに。それでおみくじについては分かった？」

安子様はみんなに聞いた。

「はい、良くわかりました。どうもありがとうございました」良介らは、おみくじを引けなかったことは実はお経を長時間読めないのが原因だったので、少しひきつった顔で良源上人と安子様に挨拶した。

「君らがおみくじを引く時間がないのは残念だな。しかし仏の道を信じまっすぐに生きれば、良いことが起きるであろう」

「それでは、さようなら」良介たちはそう別れを告げた。

「それじゃあ、良源上人のことについて、象徴的なことがあった時代に行ってみましょう。『吉むすび』を出して、良源上人のことがさらに分かる出来事があった時代に行きたいと念じるわよ」

角大師

** 三、角大師**

「ここはいつの時代？」そして3人はまた別の良源上人の時代にやって来た。

「また、良源上人に会えるのね。楽しみだわ。それに安子様にもまた会えるかな？」海は良源上人と安子様に会えると思うとワクワクしていた。

「実はね」ミクが良介と海に深刻そうな顔で話し始めた。「安子様はもう既に亡くなられたの」

「えっ！」良介と海は愕然とした。

「さっき、言うことができないことがあると言ったの覚えてる？」ミクは寂しそうな顔をした。

「あっ！」良介と海はミクの言葉を思い出した。『今あなたたちに言うことができないことがあるので』

「安子様はあの後三男四女を生んだの。それは良源上人の言った通りだったわ。そして息子は冷泉天皇となって、皇后様としては本当に成功した方だったわ。でも良源上人がこれも言っていたように、他の人に優しくしなさいと言ってたわね。安子様は、あれから、子供はたくさん授か

角大師

ったけれど、村上天皇が安子様の従妹の藤原芳子様を迎え、その美しさに嫉妬して、壁の穴から土器の欠片を投げつけたりしたの。それで毎日がそんな感じだったのよ。そして三八歳の若さで産後の具合が悪く亡くなられたのよ」ミクは安子様の波乱の生涯を話した。「でも子供達には兄弟間では順位争いはせず、就任には、兄弟の順番を守るようにと言っていたわ。それで閑白になる順番など兄弟争いは起きなかったのよ」

「そうなの。それでも、あの安子様がそんなに若くして亡くなったなんて本当にショックだね」良介は友達のように接してくれた安子様を思い出していた。

「みんなで安子様のために黙とうし、安子様の成仏を祈りましょう」ミクは良介と海にそう伝え、三人は黙とうした。

良介と海は学校の教室でのある出来事を思い出していた。

それは芳雄という同級生のことである。彼がやはり同級生の安男からいじめを受けているのを時々見ていたのだ。芳雄は頭が良くスポーツも万能の優等生タイプである。そんな芳雄は先生からも好かれ、他の生徒からはエコひいきされているようにも見えた。実際良介たちもそのように感じるがあった。

角大師

テストでもほとんど90点以上しか採らない芳雄はテストをクラスで返される時先生はニコニコして「今回も頑張ったな」と言われるが、安男の場合50点もいかないときもあり、「遊んでばかりいないでちゃんと勉強しろよ」という具合に叱られる。そんなことが毎回続くと芳雄に対する嫉妬心が湧いてきてしまうのだろう。元々芳雄と安男は仲が良かったのだが、安男の芳雄に対する嫉妬心から安男に意地悪をしてやろうという気持ちが湧いてきたのだった。

ある時芳雄が学校の廊下を早足で歩いていた時、安男が足をち突然足を出した。芳雄は運動神経がいいのでつまづいたが転びはしなかった。すぐ振り向き「危ないな！」と安男に言いかけたが、当の安男は無視をして背を向け歩いて行ってしまった。このことがきっかけで安男は仲のいい友達らと芳雄のことを無視し始めた。そしてだんだん芳雄は疎外感を感じ始めていたのだった。

良介と海は、安子様が芳子様に対し土器の欠片を投げつけたことが、この安男と芳雄のこととダブって感じていた。そして今同級生である芳雄と安男がこれからまた仲良くなればいいのにと思っていた。

「ところで、この時代は良源上人様が七十歳を過ぎたある日の夜よ」ミクが話しているとき、町の家々から人々の苦しむ声が聞こえてきた。「どうしたのかしら」海は少し怖くなっていた。

角大師

良源上人が七十歳を過ぎて、実は町には疫病が流行っていたのだ。そして多くの民が死に、苦しんでいる者もまだまだ多かった。その病気は天然痘のほか、赤痢、麻疹、そのほか流行性感冒であった。と同時に当時はこれらの病気は悪例である鬼が起こしているという噂が立っていた。

「この疫病の民たちの苦しみはいかほどであろうか。どうにか、苦しみを和らげてあげたい」

良源上人は一人、延暦寺のお堂に座っていた時のことであった。

「邪魔してはいけないからこの上から、見るわよ」海と良介、ミクの三人はお堂の天井裏から見ていた。

その日は一日天気が悪く、夜になっても雨が止まず反対に強く降り出してきた。「ゴロゴロッ、ドッカーン」

「キャッ！」海は雷の音に驚き、良介に抱きついた。良介は驚きながらも好きな海に抱きつかれて悪い気分ではなかった。

しかし良源上人にはそんな雷の事は全く頭になく、人々の苦しみをいかに取り除くかという事で頭がいっぱいだった。

角大師

そしてそこへ気持ちの悪い妖怪のような者が良源上人の前に忽然と現れた。良介はまた海の叫びそうな口を押えた。雷の次は妖怪。こんなに恐い気持ちになったのは、海はもとより、良介も初めてであった

「お前は何者だ、何しに来た？」良源上人はその妖怪と対峙した。

「私は疫病をつかさどる、百鬼夜行のかしらでございます。この度お上人様が厄をお受けになることとなりました故、参りました。お上人様にこの疫病を享けて頂くのは、恐れ多いのですが、どうぞお願い申し上げます」鬼のかしらは鬼らしからぬ言葉で答えた。

「うむ。私も今、民らの苦しみはいかほどであろうかと思案しておったところだ」そして、何やら呪文を唱えて、左の小指を出した。するとその指から、疫病が入り、全身にみるみるうちに痛みが走り、ひどい熱が出てきた。良源上人は普段から修行をしており、大抵の事ならば大丈夫であるのだが、今回ばかりは、さすがの良源上人も「はっ、はっ。おーっ！これはたまらない」

と体がまるで地獄にでもいるようであった。しかし良源上人は、自分の体より、この耐え難い疫病の苦しみを民が受けていることを嘆きながら、また呪文を唱え、指を弾いた。すると鬼のかしらは、直ちに良源上人の体から弾き出され、這いながら逃げて行った。この様子を良介、海そしてミクは雷や雨の音など忘れ見守っていた。

角大師

やっと落ち着いた良源上人は「私がこの指だけを侵されただけで、これほど苦しむならば、民はどれだけの苦しみを受けているのだろうか。なお更早く何とかせねばならぬな」と心に何か決めたようであった。

そして良源上人は夜叉の格好をして鏡に映し、それを紙に写した。その夜叉の絵を弟子の僧に版画で刷らせ、町の民に配った。それを民の家の玄関に貼ると疫病はようやく治まったのであった。

（このお札は今でも難から逃れるために家に貼っている人も多いのである。そしてこれが由縁で角大師ともいわれるようになったのである。）

このように良源上人は民の事を思いやり、延暦寺ではお堂を立て直したり、規律を作ったりし、延暦寺中興の祖と呼ばれるようになった。

そして九八五年の一月三日に亡くなり、天皇からは慈恵大師という名を贈られ、更に元三大師と呼ばれるようになった。

「おみくじの始まりと元三大師様については分かったよ。この後は僕たちが知っているおみくじになるんだね。」良介はもうすべてわかった気分で尋ねた。「待って。まだ、元三大師様がいたのは平安時代よ。まだまだ、おみくじにまつわる話はあるのよ。最初に平安時代のすぐあと鎌倉

角大師 / 源頼朝

時代の初めに行くわよ。あなたたちが名前はよく知っている人に会いに行くわよ」ミクは早く伝えたいとわくわくしていた。

「誰々？」

「鎌倉時代で知っている有名人物は誰？」

良介と海は顔を見合わせながら、「まず、最初に出てくるのは、僕と同じ名前の将軍源頼朝かな」

「正解！」ミクは嬉しそうに答えた。

「それじゃあ、鎌倉時代の源頼朝に会いに行くわよ。『吉むすび』を出して、念じてね」

** 四、源頼朝**

三人は鎌倉時代の初め、鎌倉に来た。

「源頼朝に会えるの？ すごい！ でも源頼朝とおみくじは何の関係があるのかしら？」海は興奮しながらも不思議に思った。将軍がおみくじを引くなどと夢にも思っていなかったのである。三人は頼朝が住んでいると言われる鶴岡八幡宮の東側にある大蔵御所にやって来た。「すみません、

源頼朝

頼朝さんはいますか？」まるで友人の家を訪ねるように言った。

「無礼者、頼朝さんなどと気軽に話しかけるのはどこのどいつだ」館から、家来の者が出てきた。

「ごめんなさい。僕は源良介。将軍様がおみくじと関係があると聞き、お伺いに来ました」良介はとっさに答えた。

「何と、源氏の方か、上様と関係があるならば、無礙に断ってはまずいな。今しばらく待たれよ。

上様に確認して参る」家来の者が答えた。

「上様、門に上様にお目通り願いたいという者が来ております。名を源良介と申すものです。また付き添いに二人女子がおります。何かおみくじの事でお目通り願いたいと申しております」

「はて、良介とは誰だったかのう。だが、おみくじについては私も今気になっていることだ。連れてまいれ」源頼朝は承諾し、面会が実現することになった。

「私に会いたいと申している、源良介と申す者はそなたか？」源頼朝は威厳のある声で尋ねた。

「はい。確かに僕が源良介です。将軍様がおみくじが好きだと聞いて、お話を聞きたくて、やっ

源頼朝

てきました」良介は源頼朝と自分が直接話しているかと思うと少し妙な気分で答えた。

「おみくじか。私はこの国を治めなければならぬ非常に重要な仕事をしており、そのためにも何かある度に、神社に参拝し、おみくじを引き、神意を確認しておくのだ。この鶴岡八幡宮も元の由比若宮はもっと海の近くにあったが、あの当時はまだまだ平家の力が強い頃であり、またこの鎌倉の町も整備しなくてはならず、おみくじで神意を確認したところこの地が良いとのことで、移転したのだ」

「そうでしたか。将軍様も元三大師様のように、皆の事を考えているんですね」

「何、元三大師様とな。それは良源上人様のことか。わしは、このおみくじを作ったと言われる、元三大師様を尊敬しておくのだ。元三大師様の事を知っておるとは、嬉しい限りだ。それにそちの名前も、源という名が同じで奇遇だと思っておる。何か問題に巻き込まれそうになったならば、そちの源という名前を出せば、人々は悪いようにはせぬぞ。それでは、私は忙しいゆえ行かせてもらうぞ」と言い、頼朝は出て行った。

「頼朝将軍もおみくじが好きだったんだね。でもおみくじを引く理由が今とはだいぶ違うね。すごく重要なことについておみくじを引いているね。それに源と言う僕の名字役に立ったね。まさか僕のご先祖様は頼朝将軍なのかな？」「まさか！ でもありうるかも！」
良介と海は勝手な想像

本能寺の変

をして盛り上がった。

** 五、本能寺の変**

「ミク！ まだおみくじにまつわる話はあるのかな」良介が聞いた。

「まだまだ、あるわよ。次は日本の歴史的な大事件が起こった時よ！」

「えっー！ 大事件！ 何々！」

「それは、あの織田信長が暗殺された『本能寺の変』よ！ 誰が織田信長を暗殺したかは知っているわね」

歴史好きの良介は「明智光秀！」と大きな声で言った。

「正解！ じゃあ明智光秀の所に行ってみるわよ。また『吉むすび』を握って念じてみて」

ミクは二人に言った。二人は言われるままに念じた。しかし行く先が戦国時代の『本能寺の変』の時と聞くと、テレビで見るのは、良いが実際にその場に行くのは怖かった。

本能寺の変

そして三人がやって来たのは、京都は左京区にある愛宕権現堂、ここで明智光秀と親交のある者と連歌会と言う会を催した。この会で明智光秀は愛宕百韻世呼ばれる歌を詠んだ。「ときは今あめが下なる五月かな」この句から始まるものだ。ミク、良介、海の三人は権現堂の外から歌会の様子を見ていた。

そこへ突然大きな声をした。「お前ら何者だ。怪しいやつ」明智光秀の家来に見つかってしまった。

「えっ！ そんな私たちは怪しいものではありません。明智光秀さんが引いたおみくじについてお聞きしたくやってきました」恐ろしいながらもミクはとっさに答えた。

するとそこに明智光秀が通りかかった。「どうしたのだ、こやつらは、何者だ」

「明智光秀さんですね。私たちは、おみくじについて調べていて明智光秀公がこの度、おみくじを引かれると聞き来たのです」今度は海が答えた。

「何！ なぜ拙者がおみくじを引くことをそなたが知っておるのだ。怪しいやつらだ」光秀はその時一番頭にあったことを言われ、驚きミク達を牢にでも入れようかと思ったその時。良介は源頼朝が言った言葉を思い出した。時代も場所も違うのでそれを言っても意味ないかと思いつつも

本能寺の変

「僕は源良介です。源頼朝將軍もことあるごとに、おみくじをひいていたんですよ」
「何、お主らは、源頼朝公がおみくじで諸々のことを決めておられたこと知っておるのか」光秀はまたまた驚いて尋ねた。「頼朝公は我が清和源氏の流れである、鎌倉幕府の初代將軍。それを知っているとは誠に嬉しい限りだ。それにぼうずは、同じ源性を名乗る者大目に見てやろう。ところで拙者のおみくじについて知りたいとな。これは大切なことなので、お主に知らせる訳にはいかない。しかし頼朝公に免じて少しだけ教えてやろう。これから拙者は三枚のおみくじを引く」

「えっ！ もう三枚もひくと決めているんですか」良介は驚いて尋ねた。
「これはまず三枚のおみくじを引き、部屋の隅三箇所におみくじを置き、そこに一枚ずつ錢を投げ一枚だけ表裏が違っておるのが運勢なのだ。お主らにはその三枚は見せてやろう。しかし錢の表裏までは見せる訳にはいかない」光秀は答えた。
といい参拝して織田信長打倒を念じながら元三大師みくじを引いた。
「比叡山延暦寺を一度はあの信長公の命により、焼き打ちという大それたことをしてしまったが、今は西教寺を復興させ、おみくじの租と言われる元三大師様を尊敬して

本能寺の変

いる。そしてこの拙者が今まで因縁のあった信長公を撃つことが本当によいかどうか、元三大師様におみくじで問いてみるのだ。

「やっ！」一枚目は三番凶であった。「何と、そうか」険しい顔をした。そして二枚目「これだ！」

二枚目も三九番凶であった。「またか！」ますます険しい顔になった。そして最後の三枚目を祈りながら引いた。「やっ！」最後に引いたのは一番大吉であった。光秀はようやく安堵した。「さてこの三枚の内一枚が拙者の運勢となるのだ。悪いがここまでしか、そなたらには見せられぬ。

部屋を出て行ってくれ」光秀はミクたちに言った。そして部屋の戸を閉めると光秀の歩く音が聞こえた。先程のおみくじを三に隅置いているのであろう。そして「カタカタ。カタカタ。カタカタ」と三枚の銭を投げる音が聞こえた。中から「オーッ！」という声が出た。

三人は神社を後にした。

「あのお金を投げた結果はどうだったんだろうね」良介は思いを巡らせた。

「光秀公は、本能寺の変を起こすので、大吉だったのよ。あの一番のおみくじとは『七宝の浮図の塔高峰頂上に安んず衆人皆仰ぎ望む等閑の看を作す莫れ』と書いてあって、『このみくじを得たる者は、威勢強く万人に尊敬される。ただし頂点を極めた形なので、何ごとにも自重して行動すべし』という意味があったわ。光秀公はこのおみくじをどう考えていたのかしらね。でもあ

本能寺の変 /天海上人

のおみくじには、更に運勢で『生死は死すべし』とあるのよ。」

「ということは、事を起こしても最後には死んでしまうということなの？」

「結局そうだったわね」

「おみくじは一つのところだけを見るのではなく、やはり全体を見ないとだめなのね」

** 六、天海上人**

「さてまだおみくじにまつわる話はあるの？」海はミクに尋ねた。

「もちろんあるわよ。ほとんど今の明智光秀公と同じ時代だけど、じゃあ、また『吉むすび』を出して、今度は江戸時代の初期に行くわよ。会いに行く人は慈眼大師様。この慈眼大師様だけれど現代では明智光秀公が慈眼大師様になったともいわれているのよ。すぐおみくじに関する人たちは目に見えない結びつきを感じるわね」

天海上人

そして三人でまた慈眼大師様に会いに行くと念じながら、吉むすびを握りしめた。

するとそこは江戸上野の寛永寺という寺だった。「ここは江戸時代よ」

「すみません、慈眼大師様はいますか」良介はそこを通りかかった小僧さんに尋ねた。

「慈眼大師様？ そういう方は、ここにはいませんよ！」小僧は答えた。

「あれっ。いないって」良介はよく分からなかった。「違う場所に来たんじゃない」

ミクは答えた。「ご免、間違えた。慈眼大師様はなくなってからもらう名前で、今は天海上人だったわ」ミクのそそっかしさに良介と海はくすつと笑った。

海は、「そうなの、私は天馬海、馬を取ると天海ね。私の名前と似ているわ」と少し嬉しかった。

「そんなことより、天海上人に会わなくっちゃ」良介は言った。「すみません、天海上人はいますか？」

寛永寺の小僧が答えた。「上人様は徳川家康様の所においでです」

天海上人

天海上人は元三大師と同じ天台宗の僧侶であり、やはり子供の頃は、比叡山で学び、その後江戸に出て、家康から帰依されており、家康公から宗教に関する質問を対応していた。この江戸に東の比叡山として東叡山、寛永寺を開いたのである。そして元三大師を非常に尊敬していた。また家康公はあの本能寺の変では、織田信長公に恨みが残っており、明智光秀公に対しては畏敬の念があるとも言われている。また家康公は源頼朝に対しても畏敬の念の抱いており、天海上人が日光東照宮を作り上げ、家康公と共に豊臣秀吉公、源頼朝公を祀っている。

天海上人が寝ていたある夜の事、「天海よ！ わしは良源である。信州の戸隠山明神にわしが観音様から頂いた観音百籤がある。これは人々を救う処方箋である。望む者は行いを良くし、これからの運勢を知りたいと占えば、その願いに応じ将来を知ることができるであろう。そうして民を助けよ」と夢の中で元三大師は告げた。

天海上人は元三大師からお告げが自分にあったことを大変嬉しく思うと同時に、その観音百籤で衆生を救うことができると思い胸が弾む思いであった。

元三大師を崇拜する天海上人は夢から覚め、飛び起き頭をすっきりさせて、もう一度元三大師の言ったことを頭のなかで整理した。そして「信州の戸隠明神でございますね。承知致しました。きっと観音籤を見つけて、衆生の民のために尽くす所存です」そして天海上人は信州の戸隠明神

天海上人

に小僧を送った。

良介、海、ミクの三人は天海上人が遣わした小僧を追い信州の戸隠明神に向かった。

「あのイケメンの良源上人様だね。でも夢のお告げって本当かな」良介は言った。

「そうね、でもきっと何かあるはずよ。だって私と同じ名前なんだもの」海と嬉しそうだった。

「小僧さん、待って、私たちも戸隠明神に連れて行って」良介と海そしてミクは小僧について信州まで付いていった。

「お前さんたちは誰だい？ 何で戸隠明神まで来るんだい？」小僧は聞いた。

「それは、今あなたが取りに行こうとしているものは、これからの日本ですごく人気のある物になるの」

「へーっ、そうなのか。じゃあ、やはりこれから取りに行くものが多くの衆生を救うのだな。」小僧は嬉しくなった。

天海上人

「うーんっ。救うかどうかは、分からないけど、多くの人が楽しみにしているのよ」海は戸惑いながら言った。

「いや、そんな遊びみたいなもではねえ。これは天海上人様が崇敬す元三大師様が天海上人様の夢に出てきたのだ。天海上人様はおいらにこう言った。『私が寝ていた時、崇敬する元三大師様よりお告げがあり、信州の戸隠明神に納めてある観音百籤を持ち帰り、それは吉凶を占うもので、それでもって衆生を救えとのことである。私は徳川家康様の御用で忙しく行けない。そこでお前に、この観音百籤を取りに行かせる重要な役目を遣わす。きっと、この役目を果たし、観音百籤を持ち帰るのだぞ』つまり衆生の為になれと言われたのだ。だから、もっとこのお札は大切にしなければならぬ」小僧はちょっと興奮した。

「そうね。元三大師様も天海上人様も、みんな真剣に民の事を心配してこのお札を小僧さんに取りに来させたのだから、おみくじはもっとよく読んだほうが良いんだわ」良介と海はおみくじのありがたみが今まで以上に分かってきた。

そして現代っ子の良介と海は、へとへとになりながら信州までの道のりを歩いてきた。そしてようやく小僧と三人が信州の戸隠明神にたどりついた。ここは信州、今の長野県である。小僧は江戸から信州まで旅をし、ようやく信州の戸隠明神にやって来た。

天海上人

「うーんっ。救うかどうかは、分からないけど、多くの人が楽しみにしているのよ」海は戸惑いながら言った。

「いや、そんな遊びみたいなもではねえ。これは天海上人様が崇敬す元三大師様が天海上人様の夢に出てきたのだ。天海上人様はおいらにこう言った。『私が寝ていた時、崇敬する元三大師様よりお告げがあり、信州の戸隠明神に納めてある観音百籤を持ち帰り、それは吉凶を占うもので、それでもって衆生を救えとのことである。私は徳川家康様の御用で忙しく行けない。そこでお前に、この観音百籤を取りに行かせる重要な役目を遣わす。きっと、この役目を果たし、観音百籤を持ち帰るのだぞ』つまり衆生の為になれと言われたのだ。だから、もっとこのお札は大切にしなければならぬ」小僧はちょっと興奮した。

「そうね。元三大師様も天海上人様も、みんな真剣に民の事を心配してこのお札を小僧さんに取りに来させたのだから、おみくじはもっとよく読んだほうが良いんだわ」良介と海はおみくじのありがたみが今まで以上に分かってきた。

そして現代っ子の良介と海は、へとへとになりながら信州までの道のりを歩いてきた。そしてようやく小僧と三人が信州の戸隠明神にたどりついた。ここは信州、今の長野県である。小僧は江戸から信州まで旅をし、ようやく信州の戸隠明神にやって来た。

天海上人

小僧は当然仏教徒なのだが、当時は神仏習合といって仏教と神道はかなり密着していた

のである。そして鳥居の前で「私は江戸の東叡山、寛永寺から来たものです。本日は天海上人様の言いつけにより、こちらの神社にある観音百籤を取りに参りました」と心の中で唱え、礼をして神社に入っていった。御宝前にやってくると木箱が置いてあった。その箱をドキドキしながら開けるとそう百枚のお札が入っていたのである。それが今のおみくじの元になる物であった。

「これが、天海上人様が言われていた観音百籤か。おいらがこれを江戸に持って行けば、多くの人が救われるのだな」と小僧は思った。

「あの良源上人様のおみくじだわ」海は良源上人を思い出していた。

そして江戸に帰った小僧たちは早速、天海上人にその観音百籤を渡した。

天海上人も嬉しそうに早速その観音百籤を纏めた。

「元三大師様、確かに観音百籤は受け取りました。この籤を持って衆生の民の暮らしを楽にさせたいと思います。ありがとうございます」と天海上人は心の中で言った。

しかし当時は、紙はまだ貴重だったので今の様にお札にして人々に売ることはできなかったで

江戸時代の初詣

のある。

** 七、江戸時代の初詣**

「これからおみくじはどうなるの？」良介と海はミクに聞いた。

「じゃあ、もう少し後の江戸時代を見てください」

三人は『吉むすび』を握りしめた。

「ここは江戸中期の神社の境内のお正月。」

「あれっ。人が少なくて、何かお正月らしくないな」良介は違和感を感じた。

「そう、初詣は元々恵方参りと言って、その年の恵方の神社にお参りするのよ」ミクは説明した。

「じゃあ、おみくじはいつどこで引かれるの？」良介は聞いた。

江戸時代の初詣

「おみくじの起源はこの前天海上人が元三大師から夢で言われたけど、人々を救うのだから特にお正月でなくてもいいのよ」ミクは答えた。

「でもおみくじはあるの？」海は尋ねた。

「あるわよ、ほらあそこにおみくじの筒があるでしょ。あれを振ってみて」ミクは言った。カシャッ、カシャッ、筒を良介と海は振ってみた。

「僕は五十五番。」「私は十番だわ。でもおみくじの紙はないの？」

「あそこに言って聞いてみて」

「すみません。おみくじ五十五番を引いたのですが」「私は十番。」

「五十五番と十番じゃな、えっと。どれどれその係りの者は一冊の本を二人に渡した。」

それは「元三大師みくじ本」と呼ばれるものでその当時はまだ一枚ずつのおみくじはあまり作られていなかった。

江戸時代の初詣

「ここに運勢が書いてあるから読みなされ」

「えー。自分で読むの？ 何か日本語みたいだけど、すごく難しいな。読むのを手伝ってもらえますか？」良介は神社の人をお願いした。

「五十五番は（雲散じ、月重ねて明らかに／天書、至誠を得たり／然く阻滞（そたい）多しといえども／花は発（ひら）き、再び重ねて栄えん。）

つまり、『今までの憂いは散じ、願望は成就するだろう』ということじゃ。』

十番は『旧用多く破れを成し新更して始めて財を見る改めて雲外の望を求むれば枯木春に遇うて開く』これは、『今までの状態で良しとせず、心を新たにして物事にとりかかれば吉。そうすれば運も開ける。』ということじゃな」こう説明された。

二人とも良いということは分かったが、二人にはまだ少し難しい内容だった。

「この頃、まだ紙は貴重であり大量には作られていなかったのよ。そしてお家の一大事の時など本当に神様をお願いしたいときに引いたものだったけど、それがだんだんと一般庶民にも広

江戸時代の初詣／おみくじを結ぶ習慣

がっていったの」ミクは説明した。今現代のおみくじを良介と海は思い出した。「そうか今はおみくじはすごく簡単に引けて、それもすぐ結ぶ人が多いな。そういう人はおみくじに書かれていることはあまり気にしない人なんだな」良介は寺社の境内に結ばれているたくさんのおみくじを思い出した。「そうね。おみくじは神仏からそれぞれの個人への特別なメッセージなのよね」海はひいたおみくじがすぐ結ばれるのをもったいなく思った。「ところでおみくじを結ぶということはどうやって始まったの？」良介は聞いた。「じゃあまた、少し後の時代に行くわよ」ミクは二人に言い、三人は「吉むすび」を握りしめた。

** 八、おみくじを結ぶ習慣**

「ここは明治時代の神社」ミクは言った。

「あっ、おみくじを引いている人がいる。そして木に結んでいるわ！」海が見つけ指を指した。

「すみません。そのおみくじ何で結んでいるんですか？」良介は尋ねた。

おみくじを結ぶ習慣

「だってみんながおみくじをこの神社に生きている木に結び付けると縁ができるって言っているから。その人たちは、吉凶は分かったけど、神仏から頂いたものだから捨てるのはちょっと気が引けるの。だからみんながするように結んでいく人もいるのよ」と参拝者が説明してくれた。

「そうか。そしてこれがそのまま今、平成の時代まで受け継がれている習慣だったのね」海は納得した気がした。

「そうと言いたいところだけど、この明治時代にちょっとした騒動がおきたのよ」
「えっ！ 騒動！ 黒船が来たのは江戸時代だったはずだけど」良介は社会で勉強したことを思い出していた。「あと明治維新があったんだっけ」

「そう明治維新があって、そしてお寺と神社の間に問題が起きたのよ。実は仏教が日本に伝来して以来、日本の神道と仏教を同一視する考えがあったのよ。天海上人のお札を取りに行った小僧さんも神社に行くのはすごく普通だったわよね。そして神社に付属する寺の神宮寺等も建設されたりしてきたの。だけど明治になり、祭政一致、つまり宗教と政治と一緒に考える動きが出てそれを実現する為、日本古来の神道と仏教を分けて考えるようになったの。そして神仏分離令が明治政府から発せられ、それが更に廃仏毀釈という運動がおこり、仏教に関するものが壊されたの」ミクは説明した。

おみくじを結ぶ習慣

「そんなことがあったの、今はお寺も神社も平和的でそんなこと考えられないのね。そうかそれでおみくじも影響を受けたということなのね」海が言った。

「そうよ。それまではおみくじとしては元三大師御籤が一般的だったけど、古事記の時代の昔から歌占という占いがあり、神様と和歌で占いをしていて、それがこの明治になり結びついたの。例えば、日本の代表的な和歌の万葉集、そして学問の神様の菅原道真の和歌、明治天皇様と昭憲皇太后様の和歌、ことわざや訓戒そして各神社の神職の方が独自に作ったものなど多様化してきたわ」ミクは現代の神社のおみくじについて説明した。

「そうか。だから神社のおみくじは元三大師みくじを使っていないところが多くあるのね」

「そう。ついでにおみくじを引くマナーもあるので教えておくわね。おみくじを引く前にお参りを済ませる事。そしておみくじを引くときは、神仏に何を占って欲しいかを心に念じて引いて」ミクは更に説明した。

「おみくじの事で知らないことがいろいろあったけど、ミクに教えてもらいすごく勉強になったよ」良介はミクに感謝した。

おみくじを結ぶ習慣 /おみくじの効果

「それにしても良源上人様はかっこよかったわ。それに人々のことを思ってすごく立派な人だったわ」海は良源上人を思い出していた。

ミクは二人がおみくじについて知ってもらえたので、満足していた。

** 九、おみくじの効果**

「良介の部屋に朝日が差していた。「もう起きなさい。お雑煮ができたわよ」良介のお母さんは良介を起こした。

「あれっ。どうしたんだろう。ミクは？ 海は？」良介は見まわした。

「何寝ぼけているの！ 早くお雑煮を食べて」お母さんは少し呆れて言った。

「そうかあれは夢だったのか。でもすごくおみくじの事が前よりも大切なものに思えてきた。」

そして昨日、お寺で引いてきて、机の上に置いていたおみくじを見ると、不思議なことに新しい吉むすびが置いてあった。

おみくじの効果

「それは私からのプレゼントよ」とミクの声が聞こえた。

た。「一つは良介に、あと二つは同級生の安男君と芳雄君ね。あの二人にその吉むすびをあげて！ あの二人もおみくじを引いて持ち帰っているはずだから」

冬休みが終わり新学期が始まった。良介は登校中、海と出会いあのミクとの出来事が夢だったのか、本当だったのか話したが海も同様の夢を見た話し、更にミクからもらった新しい吉むすびを見せ、安男と芳雄にあげるように言われたと話した。海もミクから同様に新しい花柄の吉むすびをもらっており、にこにこしていた。

学校ではホームルームの時間、生徒がみんな冬休みに起きたことを話していた。「良介は僕は冬休み家族で初詣でに行きおみくじを引きました。そして天馬さんと偶然会い、天馬さんはおみくじは結ばないで持ち帰りケースに入れてたのを見て、おみくじに興味を持ちました。それで今はこのおみくじのケース「吉むすび」に入れて時々読んでいます」と発表した。

クラスの間みんなもおみくじを引いた生徒が多く、「おみくじはひいたら結ばないといけないんだよ」とか「みんな持ち帰っているけれど、別に持ち帰っていいかなと思ひ財布に入れてるよ」とか話していた。芳雄と安男もおみくじを引いたが二人は持ち帰って引き出しに入れていた。良介はミクからもらった「吉むすび」を二人にあげた。二人は喜んで「サンキュー、おみくじをこ

おみくじの効果

れに入れるよ」と喜んだ。

それから数日後、同じおみくじ入れ「吉むすび」を持っている二人はランドセルにぶら下げていたが、仲間意識みたいものが湧いたのか、楽しく話している姿を良介は見た。おみくじを読み返すことでいろいろと良いことが起きるのかもしれないなと良介は感じていた。そしてあのおみくじのルーツを求める旅について思い出した。「ミクありがとう。そして安子様、源頼朝將軍様、元三大師様、天海上人様ありがとうございます。これからこのおみくじに書かれている言葉を読みます」と良介は心に決めた。

おわり

おみくじのルーツを探しに

著 memphistets916

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
